

## コロナの中に見出す希望の光 ～キリスト教シンパと共創するポジティブネット

太田直宏

ひとりがよくなると　世界はきつこう変わる。

ひとりが「よくなる」と、どんなコトが起きるだろう。  
ひとりが「よくなる」と、その人と出会った誰かがうれしくなる。  
つまり、その人もきつと「よくなる」。  
そして「よくなる」の繰り返しは  
社会や世界をよりよく変えていくチカラになると思うのです。

その人と出会った誰かが「よくなる」  
そんな出会いとつながりを  
YMCAはこれからも大切にしたいと考えています。

「よくなる」の連鎖は  
やがて社会や世界を変えていくチカラとなっていく。  
そしてきつと平和を形にしていく原動力となっていく。

(YMCA ブランドスローガン)

### 1. 「今だけ、金だけ、自分だけ」あまりにも経済優先社会の到来

世界各地の自国権益優先主義政権発足に比例して「今だけ、金だけ、自分だけ」そんな利己的な価値観を礼賛するような風潮が目に見えて増加してきた。そして、その例に漏れず、日本もまた「あまりにも経済に偏重した」価値観が支配する社会となってしまったかのようだ。国の根幹をなす仕組みの中に、嘘や欺瞞が罷り通り、森友事件に象徴されるように、「誠実に生きる事を求めたが故に、自らの命を絶たざるを得ない」事例までもが表れ出るようになった。国家権力は増長し、市民は悪政に苦しみ続けている。今や日本は、世界で最も相対的貧困率の高い国となってしまった。カナダの大学の経済学の授業では「日本の貧困」が得意な事例として以下のように

紹介されている。「日本の貧困者は薬物もやらず、犯罪者の家族でもなく移民でもない。教育水準が低いわけでもなく、怠情でもなく、勤勉で労働時間も長く、スキルが低いわけでもない。つまり、世界的にも例の無い、完全な「政策のミス」による貧困者なのだ」と。しかしながら、失政によって招かれた結果に対して、投票行動による政権転覆も起こらず、抗議の声をあげる者もごくわずかで、結果社会のうねりとなることもない。まるで私たちは、希望の見えない闇へと突き進んでいるかのようだ。

創造的少数者として希望を語るべき存在であるキリスト教界も、残念ながらその働きを果たせていないように見える。

「キリストにお会いしたいと思って、教会に電話してみましたが、留守でした。日曜の

午前中ならと思って、出かけてみましたが、やっぱり留守でした。仕方がないので午後から寿の寄せ場に行きました。炊き出しに並ぶ日雇い労働者の長い列…。野宿者に配る毛布やスープを用意している人たち…。街角で後ろから肩を叩かれました。ふりかえると…。そこにキリストが立っておられました。」

(「片隅が天である 現代への使信」渡辺英俊：1995年新教出版)

私たちクリスチャンは、キリストに出会う場所に身をおいているだろうか。イエスに倣うという生き方を見失ってしまっていないか。社会全体がおかしくなり、そのことに警鐘を鳴らすべきキリスト者が、その役目を荷なっていない状況は、この世界を「よりよく、しかも持続可能足らしめる」とは到底思えない。だからこそ私たちは、視点を変えて、私たちのあり方を見直すべき時が来ている。

度重なる自然災害もまた、私たちから希望を奪い続けている。全世界を襲う「不条理な現実」に対峙するたびに、思い出す記事がある。それは東日本大震災から数えて1ヶ月目のAERAに掲載されていた藤原新也の写真と文章。今でもあの記事を読んだときの何とも言えない絶望的な気持ちを思い出す。

人間の「神」という領域を創造する営為は、考えてみれば不思議なことである。その見えないものを在らしめようとする思念が生まれる契機は、遊牧民族においても農耕民族においても「恵み」という自然現象と切り離せない。その私たちは“生かされ続けてきた”長い恵みの歴史の中で“そこに神がいる”という想念は当たり前のこととして人間生活の中に定着した。「だがこのたび、神は人を殺した。」土地を殺し、家を殺し、たくさんの善良の民やいたいけな子供たちや無心の犬や猫をもっとも残酷な方法で殺した。そこに破壊があるから創造があるとするインド的神学にあっては破壊にもまたそこに神が宿る。「果

たしてそうか？」私は水責め火責めの地獄の中で完膚なきまでに残酷な方法で殺され、破壊し尽くされた三陸の延々たる屍土の上に立ち、人間の歴史の中で築かれた神の存在をいま疑う。それはイワシの頭を信じる愚か者が「叫んだように”罰が当たった”」のではなく、神はただのハリボテであり、もともとそこに神という存在そのものがなかっただけの話なのだ。そして“神幻想”を失った私たちはいま孤独だ。しかしまた孤独ほど強いものもない。哀しみや苦しみや痛みを乗り越え、神幻想から自立し、自らの二本の足で立とうとする者ほど強いものはない。日本と日本人はいま、そのような旅立ちをせんとしている。

(AERA 2011年4月11日号)

それ以来「このたび、神は人を殺した」という論旨を転換させる言葉を探し続けている。東日本大震災という大災害は、私たちにこの古くて新しい問題を突きつけた。信仰を持つ者たちは、二つの大きな問題を背負ったのだ。「神がおられるのならば、なぜあのような悲惨が起こり得るのか」「神はどこにおられるのだ」「神は、なぜお救いにならないのか、あるいは神などいないのか」これらの叫びと呻きに込められたのは「神の不在」という問題である。信仰の根本が「私たちを助け、救い出してくださる神への帰依」だとするならば、まさにその原点が崩れた時だった。そして同時に「人間は、何のために信仰するのか」、つまり信仰の意義が問われた時でもあった。数年間の遍歴の後、ナチスに抵抗した牧師であったボンヘッフナーが、獄中書簡に以下の言葉を残していることに気がついた。

「僕達は、この世の中で生きねばならない—『たとえ神がいなくても』——ということを認識することなしに、誠実であることはできない。しかも、僕達がこのことを認識するのはまさに、神の前においてである。神ご自身

が僕達をしいてそのことを認識させたもう。このように、僕達が成人することによって、神の前における僕達の状態を正しく認識するようになるのだ。神は、僕達が神なしに生活を処理できる者として生きなければならないということを、僕たちに知らしめたもう。僕達と共にいたもう神とは、僕達を見捨てたもう神なのだ（マルコ15：34）。神という作業仮説なしに、僕達にこの世の生を営ませる神は、僕達が絶えずその方の前に立っている神なのである。神の前で、神と共に、僕達は神なしに生きる」。

ここでボンヘッファーが言う「成人する」ということが、私たちが到達すべき信仰者の在り方であるならば、私たちが東日本大震災やコロナ感染症拡大において受けた衝撃の中身を今一度精査しなければならない。なぜ、私たちにとってそれは衝撃だったのか。それは私たちが「神は、すべてを与え、すべてを救ってくださる」と信じきっていたからであろう。しかしながら、もし聖書の示す神が、そのような神であるならば、私たちはいつまでも大人になることなく、子どものままであり続けることになる。神は、ご自身に似せて私たちを創造されたのである。それは、絶望的苦難の状況に置かれても、それも自分の身に起こったこととして引き受け、なおも十字架のイエスに希望をもって生き続けようとする人間の姿である。「神の前で、神と共に、神なしに生きる」とは、神の似姿としての人間は、そのように生きていくことができるとの宣言に他ならない。今もそしてこれからも、世の中は不条理に覆い続けられるであろう。であるならば、「神などいるものか」と嘯くよりは、「神なしでは生きることが出来ない」という選択をし続けたい。呼べど応えず、祈れど聴きあげられないように思われるが、神は私たちの隣にいつも共にいてくださる。私たちは決して孤独ではないという希望の言葉がここに記されていたのだ。

日本のYMCAは1880年に東京で「キリスト教青年会」として始まり、この間、多様な分野で開拓者となる働きをイエスの名のもとに全国各地で展開してきた。しかしながら130年に渡る歴史を重ねる中で、その運動の輝きを失いつつあったこともまた事実である。それには、運動の事業化や、制度化といった課題に腐心する中で、運動の根源であるイエスに倣うイメージのベクトルが拡散してきたことにあったように思う。「このままではいけない」という思いが各地で湧き上がる中、東日本大震災を始めとする多発した災害や、国レベルでの法人統治の仕組みの改変などの要因を契機に、私たちは、運動の意義や目的を現代的に見直し、その伝達方法を再考する必要に迫られた。そもそもYMCA運動は、その歴史の初めに以下のように定義づけられた。「われら世界のYMCAは、イエス・キリストを聖書にしたがってわが神わが救い主と仰ぎ、信仰とその生活において彼の弟子でありたいと願う青年たちを一つとし、イエス・キリストの精神が広く青年の間に活かされるよう、その努力を結集する。」非キリスト教国である日本で、この言葉を語り続ける意味は大きい、同時に険しく困難であることも事実である。そのためにも、伝わる言葉と方法に工夫が必要である。そこで私たちは、2014年より、未来に視線を向け、YMCAがこれからも世に必要とされ、多くの方々に寄り添い続ける存在となるために運動を再編集することを決意し、その手法として「ブランディング」に取り組み始めた。多くの調査と議論を重ねた結果、2017年10月、YMCAブランドコンセプトを取り決め、その旗印として新しいロゴ・スローガンを社会に向けて発信し始めた。

2. ブランドコンセプトに込めた「あまりにも経済優先社会へのアンチテーゼ」  
YMCA運動は、産業革命真っ只中の1844

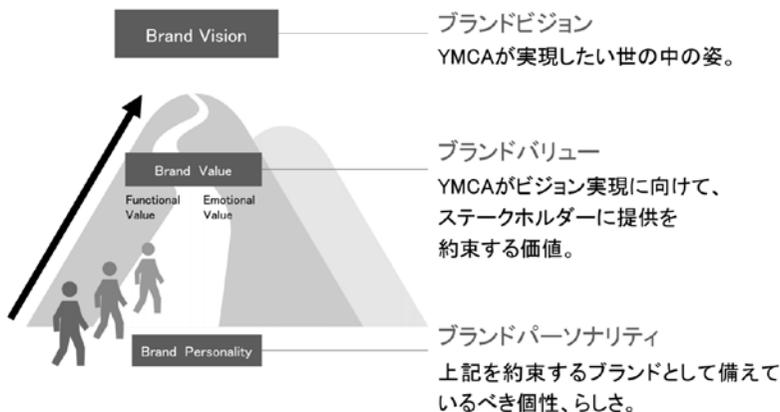
年、英国ロンドンのヒッチコック&ロジャース商会の従業員であったジョージ・ウィリアムスというたった一人の青年から始まった。当時の社会の歪を憂い、「この状況をなんとか変革したい」という彼の呼びかけに応えた12人の若者たちが立ち上がったのだ。この小さな一歩は、同時多発的に欧州で起こっていた趣旨を同じくする運動と呼応し、瞬間間に世界へと広がった。日本YMCA（1880年・明治13年創立）も同様の流れの中で、東京で誕生し、やがて全国各地へと広がっていく。その黎明期、聖書を読み、互いに祈り合うことを中心に据えていたこの動きは、やがて、さまざまな「行い」、すなわち「活動＝プログラム」を展開することが、目的達成のために有用であると気づくことで、より広がりをもった運動へ形を変えていった。しかしながら、たとえ形が変わっても、YMCAはその設立当初から「人の育ちを通して、社会をよりよく変革すること」を使命として歩んできたことは間違いない。そして、今日に至るまで、その使命実現のために多くの者が、全身全霊をかけてさまざまな活動を手段として開発し、取り組んできたのである。これらをより可視化することの必然性が2013年頃より語り始められ、YMCAはブランディングという手法に着手した。多くの労力と議論を経

た結果、できあがったブランドコンセプトは次のとおりである。

私たち日本のYMCAは、  
(提供できる価値：バリュー)  
したい何かがみつき、誰かとつながる。私  
がよくなる、かけがえのない場所。  
を提供し、  
(めざす社会像：ビジョン)  
互いを認め合い、高め合う「ポジティブネッ  
ト」のある豊かな社会を創る。  
ことを目標とする、  
(組織の個性：パーソナリティ)  
心をひらき、わかち合う。前向きで、まわり  
を惹きつける魅力を持つ。  
というブランドである。

YMCAのブランドコンセプトは、①私たちの提供できる価値、②めざす社会像、③組織の個性という3要素で構成され、それぞれに意図が込められている。今回のコロナ禍で迷った時、困った時、途方に暮れた時、私たちは常にこのコンセプトを指針として歩みを進めてきた。コロナ禍以前から、今後私たちが目指すべきものは、すでにブランドコンセプトの中に示されていたからである。それゆえ、この意図を熟慮することが、コロナ禍で

表1 YMCA ブランドコンセプト



のYMCA運動推進上、大変重要なポイントとなった。特にブランドビジョンによって示されためざす社会像に関しては、何度も言葉を反芻しながらその意味を見つめ直し、2つの意味に気がついた。

1) 人は自らを圧倒的に変革することで、利他的に生き始めることができる。

自らが「よくなる = 圧倒的に変革する」ことで、他者に対する眼差しもが劇的に変化する。「今だけ、金だけ、自分だけ」の価値観が、コペルニクスの転換を遂げた結果、利他的に生き始めた個人が、他者を認め、互いに高め合うことが可能となる。そしてその連鎖は、次へと伝搬していく。そんな社会をYMCAは目指したい。

2) 私たちには、誠実さを基盤とした「安心網」が必要である。

様々な社会課題が山積する中、YMCAはそれらを解決する仕組みとして、セーフティネット（安全網）に替わる、ポジティブネット

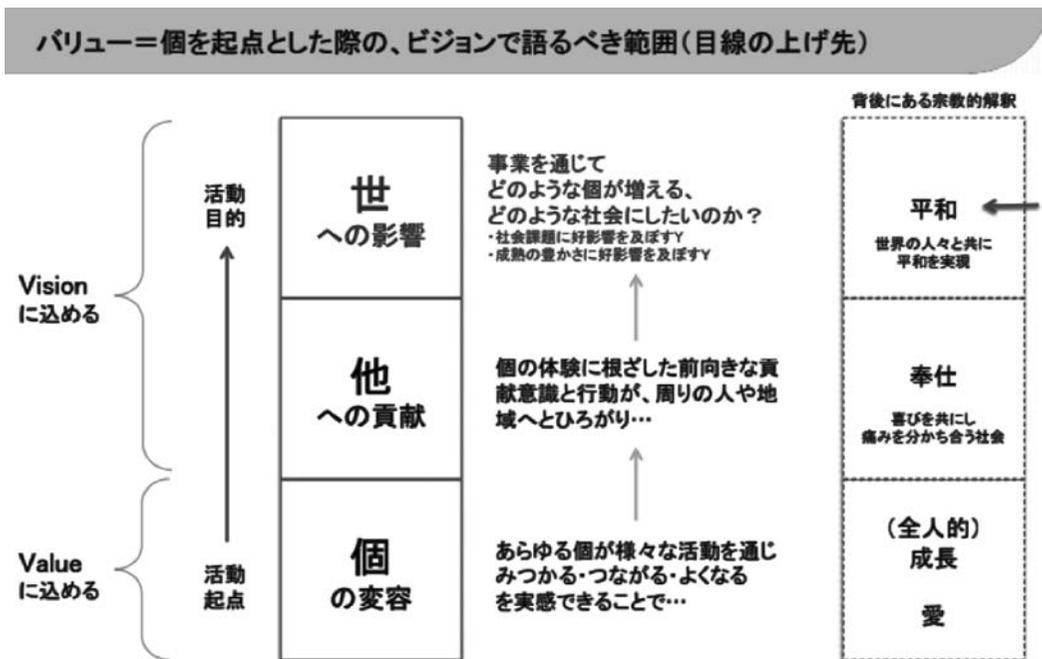
ト（安心網）を提示している。

すべての人に限りなく開かれているYMCA独自の安心網は、自らや他者を認め、高め合う前向きな気持ちを内包することで、未来と目に見えない価値を他者と共に創り上げ、社会へと広げていことができる。それは、「希望ある、より豊かな社会を創ること」と同義である。

YMCAの活動の基盤は、個の圧倒的な変容（あらゆる個がさまざまな活動を通じ、トランスフォームすることを体感する）をめざす活動である。これは、公益・収益事業（人の育成とケア）によって展開されている。

次の段階は、周りの人や地域（他者）が変容することである。それは、支援事業（人と地域の支援）として展開され、言い換えれば、他への貢献（個の体験に根ざした前向きな貢献意識と行動が、周りの人や地域へとひろがり、圧倒的には変容すること）をめざす事業と定義づけられる。

表2 ブランドバリューとビジョン



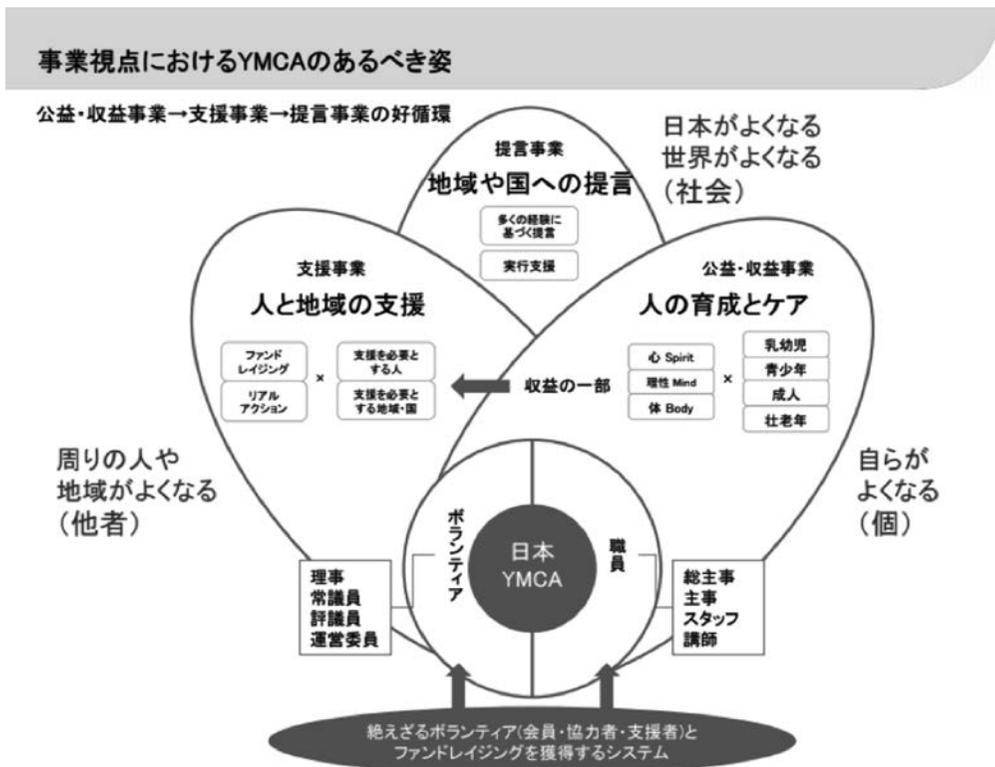
最後の段階は、日本や世界（社会）が変容することである。それは、提言事業（地域や国への提言）として位置づけられ、事業をとおして、世を変えていく働きである。個の変容という一見遠回りに見えるアプローチが、社会を変えていく、ポジティブネットの広がりとは、まさにそのようなことを意味している。すべての人が生まれてきてよかったと安心できる社会、それこそが理想ではなからうか。しかしながらご存知のように、現実はそれとは程遠いのである。

この「ポジティブネット」という新しい概念を明確にするために、関西学院大学の中道基夫教授は、「ネガティブネット」という概念を同時に創り出し、その存在を定義し、要素を以下のようなものと仮定している。

「ネガティブネット」とは、「お互いを認めることなく、足を引っ張り合い、傷つけ合い、不安や憶測、後ろ向きな考えや偏見によって束縛され、逃れようと思っても逃れられないネットワーク」であり、以下のような要素で構成されるコミュニティである。

- ・今だけ、金だけ、自分だけ。あまりにも経済に偏重した社会
- ・社会に絶望をもたらし、満たされることのない豊かさを提供する
- ・自分が困った時に、助けてとは言えないSNS
- ・ものが豊かにあるにもかかわらず、誰もが生きづらい
- ・未来に希望を見いだすことができない閉塞感の中でなんとなく幸せな社会
- ・生きるために与えられた選択肢はたった一

表3 事業視点におけるYMCAのあるべき姿



つ今だけ、金だけ、自分だけ  
 ・人と人とを分断していく、格差・無縁社会

一方のポジティブネットは、以下の要素で構成されているはずである。

- ・社会に希望をもたらし、心を満たす豊かさを提供する
- ・自分が困った時に「助けて」と言えば、誰かが手を指しのべてくれる SNS
- ・物と心の豊かさが同等に存在し、誰もが最期まで生き生きと過すことができる
- ・未来に希望を見いだすことができ、将来に向かって充実を感じる幸せな社会
- ・生きるために与えられた選択肢は多様で、自分で考えて選ぶことができる
- ・人と人とが適度の距離感を持ち、格差と無縁なネットワーク型社会
- ・お互いを認めあい、高め合うことのできるつながりがある社会

さて、どちらの具体例が現代社会に実態に近いのであろうか？ネガティブネットのある社会のほうが、圧倒的に今の日本社会そのものであると思うのは、私だけではあるまい。われわれの実態は、ポジティブネットのある社会とは程遠く、むしろ「そんなものはどこにあるのか？」というのが本音であろう。それどころか、まさに現代は、ネガティブネットの蔓延する社会そのものなのだ。そこに追い打ちをかけるかのようにコロナ禍が発生し、安全網の構築はおろか、もはやなんの助けもなく、絶望の闇の中に放り込まれた状態が当たり前となってしまった。

では、この絶望的な状況をいかに生きていくのか、そんな中で出会ったのが「リウーを待ちながら」というコミックである。カミュの「ペスト」へのオマージュであるこの作品を、私はコロナ感染拡大の只中で、そこにヒントを求めて何度も読み返した。多くのこと

をここから学んだ。感染症が他の災害と違うのは、「人から人にうつる」こと。普段同じ時を過ごしている家族や友人、会社の同僚。周りの大切な人を、自分が原因で殺してしまうかもしれない。愛ゆえの行動が、逆に感染を広めてしまうかもしれない。主に医療現場から感染症拡大を描く本作だが、感染した市民たちのエピソードからも目が離せなかった。それは、明日、私の身に起きてもおかしくない話だったからである。とりわけ「ペストと戦う唯一の方法は、誠実さということだ」というセリフが心に響いた。ここで語られる「誠実さ」とはなんだろう。

そのヒントを歴史学者である藤原辰史さんが、その著作「パンデミックを生きる指針～歴史研究のアプローチ」に書かれている。それは、武漢で封鎖の日々を日記に綴って公開した作家方方の言葉の引用である。

「一つの国が文明国家であるかどうかの基準は、高層ビルが多いとか、クルマが疾走しているとか、武器が進んでいるとか、軍隊が強いか、科学技術が発達しているとか、芸術が多彩とか、さらに、派手なイベントができるとか、花火が豪華絢爛とか、おカネの力で世界を豪遊し、世界中のものを買いあさることができるとか、決してそうしたことはない。基準はただ一つしかなく、それは弱者に接する態度である」と。

「今だけ、金だけ、自分だけ」の正反対に位置する価値観、それは利他に徹した誠実な生き方だったのだ。私にとってそれは、イエスの生き方、彼の示した「神の国の実現」と言い換えても良い。つまり、ポジティブネットとは、神の国を現代的に言い換えたものなのである。であるならば、イエスを知る私たちの日頃のありようが行いこそが問われている。この絶望的状况だからこそ、真価を問われる。都合のよい奇跡は存在せず、冷徹な現実のみが横たわっている。もし奇跡があるのですれば、それは神が起こしてくださる

のではなく「利他により成り立つポジティブネットを基盤として」自分たちが起こすものだと思われかされた。

### 3. キリスト教シンパ(クリシン)と共に構築するポジティブネットという奇跡

2018年7月7日、岡山県倉敷市真備町では、朝までに小田川と支流の高馬川などの堤防が決壊した。広範囲が冠水し、真備町だけで51人が死亡した。浸水範囲は真備町の4分の1にあたる1,200ヘクタールに及び、多くの住民が避難生活を余儀なくされた。この事柄は真備に暮らす人々、とりわけ子どもたちに大きなダメージを与えた。発災直後からクリスチャンを含む多くのボランティアが、避難所となった学校に支援に駆けつけた。これらの「今だけ、金だけ、自分だけ」とは真反対の行動原理に突き動かされてやってきた存在は、様々な人々と協力しながら支援活動を展開し、受援者であった子どもたちやその家族の心に大きなインパクトを与えた。

しかし、時間が経過し、避難所が発展的に解消されていくなかで、多くの支援者はそこを去っていくことになった。ところが、街の復興は進んだように見えたが、目には見えない住民の心の問題はまだまだ山積していたのだ。そこでYMCAせとうちは、発災を契機に創設された岡山キリスト災害室や日本基督教団と共に、2018年9月より、リフレッシュキャンプを始めとする活動を2年間継続して実施する計画を立てた。この決断を下した主因は、YMCAせとうちに「ユースボランティア」が多数在籍していることにあった。これらのユースの大多数は、クリスチャンではない。しかしながら、極めて利他的・献身的に活動を行い、その若さの持つ圧倒的成長のベクトルが、周りの人々に元氣と勇気を分け与えることができる存在なのだ。それゆえ、ユースは、私たちYMCAの無くてはならない重要な運動推進パートナーである。だからこそ

私たちは、ユースをノンクリ(ノンクリスチャン)とは呼ばず、クリシン(キリスト教シンパ)と位置づけている。つまり、YMCA運動とは、少数のクリスチャンと多数の若いクリシンの協創でこそ成り立つのだ。このユースたちは、YMCAの活動を通し多くの出会いを経験し、その出会いとの繋がりの中で確実に「よくなっていく」存在なのだ。この「よくなっていく」の訳語として、私たちはTransformをあてている。ギリシア語のメタノイアと言い換えても良い。みな、若き日にYMCAで様々な出会いを経験し、今までと全く違った価値と繋がり、圧倒的に変革され、生き方の方向性を変えていく。そして、そんな「キリスト者でないが、キリスト教の価値との親和性の高い存在」が、被災地へと派遣され、被災生活で課題を抱えながら暮らし続けている子どもたちと「クリシン」として出会うのである。その邂逅の結果、子どもたちもさまざまな呪縛から解放され、新たな価値に気づく機会となる、これこそが私たちの考える奇跡である。

以下は、キャンプ終了後、保護者の方からいただいた手紙の抜粋である。

「子ども一人一人に本気で愛情をもって接してくれている姿に、いつも感謝と共に、感動しています。有難うございます。とても明るいリーダーたちの姿に安心しています。仕事柄、大学生と接することが多いのですが『本当に同じ大学生?』と驚きながら見ています。皆さんとの関わりを通じて、子どもたちが「リーダーのようになりたい」と思ってくれるといいな～と願っています。」

「自然の中で体で感じて遊べた事は、とてもいい経験になったと思っています。できれば私も一緒に行って、楽しんでる様子を見たり、一緒に体験したりしたかったなと思います。キリスト教の礼拝?やお話や歌も、は

じめての経験だったので、面白そうに話してくれました（うちは仏教徒なので）。世界には色々な宗教や考え方の人がいる、という話を親子でしました。」

「被災以降、少し甘えん坊になっていましたが、帰ってきて解散した後、車に移動する時に、荷物を持ってあげようとする、自分で持つから大丈夫！と言われ、成長を感じられてとても嬉しくなりました。なかなか家でさせてあげられない経験をさせてもらえ、また何か一回り大きくなって帰ってきた感じがします。

被災後、色々な支援をいただく機会がたくさんあります。本当にありがたいです。物をいただくこともあったり、このキャンプの様に心の支援であったり。子供にも支援してもらえるのがあたりまえではなく、本当に感謝して、今度は自分が他の人にお返しをしてくるにはいけないと話をしてしています。まだまだ前の生活には戻れませんが、一步一步前に進めればと思っています。今回は本当にありがとうございました。」

ここには「今だけ、金だけ、自分だけ」とは真逆の、クリシンという「誠実に生きる存在」との出会いを通して、変革されつつあるご家庭の様子が描き出されている。一見遠回りに見えるが、「ひとりが変わることは、社会全体の変革に繋がっていく」まさに、ブランドスローガンが具現化するような希望を被災地支援活動のなかに見出した時であった。

「希望を希望として人々が共有するとき、今までなかった希望は、「存在」するものとして、私たちの現実となり得る。その意味で、希望は社会を変革する原動力となり得る」(東大社研編『希望学1 希望を語る』、東大出版局、2009年)と希望学は語っている。つまり、ポジティブネットを語り、「ある」もの

として他者と共有する時にこそ、ポジティブネットはここに「ある」という希望となり得るのだ。この言葉に出会ったことで「コロナ禍では、「コロナだからできない」という絶望を探るのではなく、「コロナだからこそ、希望を語る」ことこそが、ビジョンを実現することになるのだ」と思い至った。私たちはYMCA運動の灯火をクリシンであるユースと共にこれからも絶やさず掲げ続ける使命を荷っている。

#### 4. 誰ひとり取り残さないポジティブネットのある社会の実現に向けて

コロナ禍渦中の2020年8月、米津玄師さんの通算5枚目のアルバムとしてストレイ・シーブがリリースされた。タイトルは新約聖書の迷える羊と訳される英語で、ジャケットには羊のマスクを被った人が描かれている。同アルバムの中の楽曲「迷える羊」にこんなフレーズがある。

「列なす様に 演劇は続く 今も新たに  
羊は迷う 堪えうる限りに 歌を歌おう  
フィルムは回り続けている」

「あなたがたの中に百匹の羊を持つ人がいて、それらの中の一匹を失った。その人は九十九匹を荒れ野に放置しても、それを見つけるまで、いなくなった羊のもとに歩いていかないであろうか」聖書は語っている。この見失った羊は、助けるべき誰かではなく「私自身」であった。人はいつも順風満帆な人生を送ることができるわけではない。そして、この度私たちは、全世界レベルでそれを実感した。今は順調でも、何かの出来事や決断が、致命傷となって人生を壊してしまうことがある。今私たちは、コロナ禍という現実立ち竦む。まるで真つ暗闇の中に立っているかのようだ。しかし、ある時、ふと気が付いた。闇という文字の中には、音という文字が含まれていることに。私たちは今、光を見出す

ことができないでいる。しかしながら、音、声、つまり言葉が私たちを導いてくれるのだと。そんな時出会ったのが「誰一人取り残さない」という言葉、これはSDGsのたったひとつの誓いと呼ばれている。

「SDGs」とは、ご存知のように Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）のことだが、どうにも訳がしっくり来なかった。しかも注目されがちなのは17の目標と169の行動計画で、何が本質かを分かりかねていた。Sustainableの語源は[sus- =under 下から] [-tain(=hold 保持する)] [-able できる] →下で支えることができる →持ちこたえられるという意味で、橋の下に柱があって支えているイメージである。一方「develop」の語源の一つは、古フランス語の desveloper（ほどく/開く）である。つまり「包まれていたものを開く/広げる」という意味から、現在の「develop（～を発達させる/開発する）」の意味につながっている。そう考えるとSDGsは、この地球社会を支え続けるために、自分たちに内在する力を外へと引き出すためになすべき事柄という意味なのだと思う。そしてそのたったひとつの目的は「誰一人取り残さない」ことなのだ。

コロナ以前からこの言葉の存在は知っていた。あまりにも現実離れしていて、問いのたて方が可怪しいのではないとも感じていた。でもそれは「自分は取り残す側にいる」と思いこんでいたからだ。しかし、コロナ禍となった今、この言葉はリアリティをもって私にも迫ってくる。「取り残されたくない」

という心の叫びはそこここから聴こえてくる。その声に応えてくださるのは、羊飼いたるイエスであろう。「誰一人取り残さない」社会、これは希望の言葉だ。「ポジティブネット」とは、他者のできごとを自分の出来事かのように捉え、共に喜び、共に泣き、抗議の声を上げ、行動を起こし、局所的にでもフェアネスを実現しようとする関係性のこと。今だからこそ、「ポジティブネットがあったから助かった」と想える、そんな社会の実現をめざして歩んでいきたいと今切に思う。

迷える羊のサビの締めはこんなフレーズである。

「君の持つ寂しさが遥かな時を超え 誰かを救うその日を待っているよ ずっと」

日本をクリスチャンとノンクリスチャンに分ければ、1対99という絶望的比率となる。しかし、クリスチャンとクリシシとその他という風に捉え直すだけで、その比率は大きく変化し、そこに希望の萌芽を見出すことができるのだ。YMCA運動を「創造的少数足り得るキリスト者とそのことに深く理解のある多数のクリシシ」によって推進するものであると認識を変更することで、世界は全く変わって見える。

しかも神は、そのようなことを成し得る存在として、私たちをご自身の似姿として創造されたのだ。「神の前で、神と共に、神なしに生きる」そこにこそ、私たちの希望がある。

(YMCA せとうち代表理事)